

# まほろば 自然農園だより

まほろば自然農園二木農場

(……2月号より続く)

前は難しいことを書いてしまいましたが、いよいよ本題に入ります。

それでは、これから私たちは何を目指していけばいいのでしょうか？

この資本主義社会のシステムに翻弄されないで、人は生きる事が出来るのでしょうか。

それは、難しいと言えば大変難しいし、簡単と言えば意外と簡単な事かもしれません。

それは、全否定ではなく、どこまで原点に立ち戻り、どこから再出発すれば良いかというところを見極める所から始めてみたいと思います。

## 問題は農業ではなく、農産物の商品化

私は、農業がいけないのでも、貨幣経済がいけないのでもないように思います。

世界の歴史は、権力構造を変えて、私有財産を廃止したり、土地を国有化したり、議会制民主主義を

導入したり、共同体組織を作ったり、大きな変革を何度も経験してきました。それによって、改善された点もあれば、姿を変えて新しい問題点を生み出して来たというところもあります。民主主義国家によって、改善された点は、ある程度の選択の自由というところにあると思います。

それでは、現代における農業の一番大きな問題点は何でしょうか。

それは、人の命を預かる農産物がすべて商品化され、農民の生活まですべて効率化と利益優先の資本主義のシステムに組み込まれてしまった、というところにあると思うのです。



そこから、農業や化学肥料や、遺伝子組み換えや、種子戦争や、単一作物の量産化や、環境汚染や、農業を根源とする現代社会のありとあらゆる問題が発生してきているからです。

## 雇用が搾取を生み格差や身分差を生む

それでは、農業を商業化したり、格差社会をもたらしているものは何なのでしょう？

単純に考えてみたいと思います。

人が人を雇ったり、雇われたりしなければ、搾取は発生する事はありません。雇用は搾取と資本集中の原点だからです。

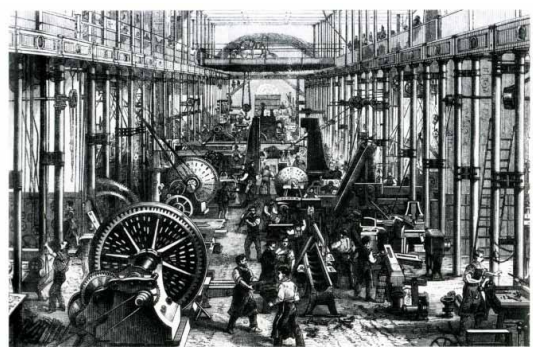
雇われるとはどういう事でしょうか？

労働をお金で売るという事です。つまり、労働(時間)を商品化するという事です。雇われた人は、契約した時間と自由意志を失い、雇用主の計画通りに働かなければなりません。

多くの場合、労働は等価交換されず、労働力の搾取によって得た利益は、雇用主によって、拡大再生産の為に資本投下されたり、投資に回ったり、利子が利子を生むという複利によって富める者はますます富み、雇用主の裕福な生活を支えます。人が人を雇ったり雇われたりすることによって、大きな収入格差や身分差や権力構造が生まれてくるのです。

## 複雑でもすべては労働力の商品化がスタート

それが科学や技術の発展とあいまって、産業革命に象徴されるような生産力の拡大に繋がり、資本の集中と格差を広げました。資本家も大企業から中小微細企業まであり、労働力の搾取どころか、赤字で賃金



を払えない企業もあり、その中でも複雑な階級構造を作っています。

さらに、お金を貸したり借りたりしたときに生ずる利子の複利計算の仕組みや、実体の無い信用経済のすべてが、元はと言えば、人が人をお金で雇うという**労働力の商品化**からスタートしたその延長線上にあるのです。

## 何故、お金が無ければ生きていけないのでしょうか

それでは搾取されていると解っていても、雇われなければいけないのはなぜでしょうか？ 現代ではお金が無ければ生きていけないからです。何をするにもお金がかかるからです。どんなに節約しても、エンゲル係数が高くなるだけで、お金が要らなくなるわけではありません。

では何故、私たちはお金が無ければ生きていけないのでしょうか。一人一人が**生産手段や生活手段を持たない**からです。とりわけ、どんなに節約しても節約しきれない食糧を生み出す生産手段を持

たないからです。ことに、都会では難しくなっています。

今では生産手段を持っている人たちでさえも、自らの食料を作るのを止めている人が多くなりました。効率的により多くの現金収入を得る為に多種類の作物を作らなくなったし、肥料や飼料や種子も自給を止めて購入するようになったからです。さらに農薬まで必要になり、そしてますますお金が無くては生きていかれなくなってしまうのです。

## 失われた生活能力と生産能力

自分たちが生きていく為に必要なものは自分たちで作っていきける生活能力と生産能力を私たちは失ってしまったのです。長い年月をかけて、少しずつ、少しずつ……。

でも、そのような能力を少しずつでも取り戻せたら、資本主義システムの輪から少しずつ抜け出せていけないでしょうか。

一人では出来なくても、独立して自給自足を目指す人たちが協力し合えば、エネルギーや肥料の自給も可能で、家を建てたり（森を育てる人も含む）野菜や穀物や果物を育てたり、家畜を育てたり、（卵や乳製品を作る人も含む）、魚を捕ったり、洋服を作ったり等々、好きな人たちが集まれば、物々交換によって（便宜的に地域通貨はあっても良いと思います）たいしてお金が無くても暮らしていける小さな単位の社会が形成されていくように思います。

上下関係や、縛りの強い組織ではなく、平等で自立した個人が家族単位で構成する、最低限のタブーだけが存在する、ゆるやかな自給的協力型社会です。



## 雇用はタブー

そこでも、能力や体力の差によって、多少の貧富の差は生まれますが、雇ったり雇われたりという雇用関係をタブーにし、搾取が発生しなければ、家族単位の貧富の差はそれほど大きくはならないように思います。（お金の貸し借りや、相続の問題など、内部的、外部的に議論しなければいけない問題は山ほどありますが）

そして、地域の中で消費して余ったものは外部に販売し、どうしても地域社会の中では生産できない必需品や、税金を払う為の現金収入に代えていきます。

## 自然と縮小する資本主義システム

自給自足を目指す人が増えれば増えるほど、外部から買うものは少なくなり、人々が、必要最低限の物しか買わなければ、お金が流通しなくなり、資本主義システムは内部から自然と縮小の方向に向かいます。

これは、消費を喚起するアベノミクスとは正反対の方向で、自給思想の実践は、ますますデフレを促進する方向に働きますが、人々が健康的な生活をするようになり、生涯現役で働ける事もあり、医療費や社会福祉関係の費用は減少していきます。

そして、自給的生活が拡大し、自給人口が増えた時、その内部から自然におだやかに社会が変わって行くように思います。

## 一人では抜け出せない資本主義のくびき

今では、自然農法を目指す人も、有機農法を目指す人も、商品価値のあるものを作れなかったり、作ったものを買ってくれる人がいなかったり、生

産コスト以上に売れなかったりで、新規就農した人のうち、10人に一人しか生き残れないと言われています。

多くの人が、自ら資本主義システムの輪の中で生きようとしているからではないでしょうか。また、一人では多くの物を自給することはなかなか難しいからです。

## 真の町おこし、村おこしとは

町おこし、村おこしも、観光資源を掘り起こし、都会の人をいかに田舎に呼び込んで、消費を拡大し、お金を落としていってもらおうかという事に主眼が置かれ、環境保全や自給の思想と真逆の方向に進んでいるような傾向もあります。

本当の町おこしや村おこしは、過疎化した村に、観光や企業誘致や、別荘ではなく、永住して自給を目指す人たちを育てていくことではないでしょうか。

## 多くの社会問題が解決

自分の衣食住を自給しようと考えた時、誰も農薬や添加物を使おうとはしないし、環境を汚染することはありません。

犯罪も、都会の保育所問題も、国家や行政が多額の税金をつぎ込んで解決しようと思っても、なかなかできない多くの社会問題も自然に消滅したり、減少すると思われま

## 耕作放棄地こそが宝の山

〈もっともっと生産力が発展し、GDP（国民総生産）が増大すればするほど豊かに幸せになれる〉という事が単なる幻想に過ぎないという事を、多くの人たちが理解していけば、荒廃した村こそが宝の山だと気づくことが出来れば、入植したい人達が増えるに違いありません。

今でも、その潮流はありますが、自給思想の本質が共有されてはいないように感じます。どんな事も端緒はすべて困難ですが、私たちは、その一翼を担う一コマになればと願っています。

大貫妙子さんが、最近発売された主人の著書『続倭詩』の一推薦の言葉一で書いて下さった『覚悟』が求められています。

— 次号につづく

